大会参加報告書

校長挨拶

校長　鈴木　愛

去る令和7年7月8日（火）、オンラインで開催された「第６１回関東甲越地区肢体不自由特別支援学校PTA連合会及び校長会合同研究協議会『埼玉大会』」に参加させていただきました。

甲越地区から約250名もの参加者が集まって開催されたこの大会、主題は「『未来の居場所』～生き生きと暮らせる社会へ～」でした。全体会に続いて行われた4つの分科会では、それぞれのテーマに沿った活発な意見交換が行われました。
オンラインとはいえ、教育や子育てについて、他県の保護者や教員の皆さんと親しくお話ができたことは、私にとっても貴重な経験になりました。

そして、「肢体不自由の子供たちに豊かな教育、豊かな生活を」という共通の思いを改めて確認することができました。私は常々ＰＴＡ活動の基盤は「つながり」だと思っています。
今回の埼玉大会でも、関東甲越地区の保護者や教員が、子供たちを中心にしてつながりを深め、思いを一つにすることができました。

そしてその思いはさらに広がり、8月の全肢Ｐ連「大阪大会」へとつながっていきます。

【第３分科会】　参加者：校長　鈴木　愛

主題：子育てと生きがい
副題：笑って・悩んで・また笑って！子育てと生きがいについて考える
発表者：東京都立花畑学園　*PTA*　中條　真理子

【提案要旨】

障がいのある子どもとの暮らしは、決してマニュアル通りには行きません。時には不 安や疲れに押しつぶされそうになることもありますが、でもだからこそ、思いもよらな い行動や、言葉にできない表情に、クスッと笑ってしまったり、心がふっと温かくなった りする瞬間がたくさんあります。

本分科会では、そんな日々の小さなエピソードを通し て、子育てにおける充実感や親としての生きがいについて、みなさんで一緒に考えてみませんか。

日常に寄り添いながら、あらためて「我が子と過ごす今」を見つめる機会をとなれば幸いです。

【分科会報告】

私は第三分科会「子育てと生きがい」に参加しました。発表校は東京都立花畑学園です。

花畑学園からは、「クスッと笑えるエピソードを分かち合おう～日々の出来事を通して考える『子育てと生きがい』」というテーマで、動画発表があり、たくさんのエピソードが紹介されました。

「子供の学校の荷物に間違ってパパの靴下を入れてしまったら、いつもの3倍の丁寧さでたたまれて帰ってきて恐縮したこと」「家族でお出かけの時、抱っこで子供を車に乗せて出発したのはいいけれど、目的地で車いすを忘れたことに気付けど時すでに遅し、『まるっと一日抱っこデー』になってしまったこと」「子供を自転車の後ろに乗せて走っていたところ、突然子供に『たすけて～！だれか～！』と大声で叫ばれ、連れ去り犯のようになってしまったこと」などなど。

参加者のお母さん方からも、「あるある～！」「わかるね～！」と共感の声がたくさん聞かれました。

肢体不自由の子供を育てていく中では、大変なことやつらいこと、不安なことがたくさんあるけれど、そんな苦労話や失敗談も笑い話に変えてみんなで分かち合うと、不思議と勇気が湧いてくる、そして子育てに生きがいを感じることができる、そんな話に花が咲きました。

助言者のうめだ・あけぼの学園園長・酒井康年先生からは、孤立しないでつながることが大切なこと、「子育て＝生きがい」とは限らず、仕事や趣味に生きがいを見出すことも含め、多様な価値観を認め合うことが重要なこと、などの話がありました。

参加者みんなで日頃の思いを分かち合い、元気をもらった分科会でした。

「あるある！」に勇気をもらう
子育ての苦労を笑いに変えて

【第１分科会】　参加者：ＰＴＡ会長　駒井　夏美

主題：*PTA*活動の活性化
副題：時代に合わせた心の通う*PTA*活動
発表者：埼玉県立越谷特別支援学校　*PTA*　峯尾　志穂

【提案趣旨】
PTA活動とは、子どもたちが学ぶ環境をよりよくするための活動です。
しかし、昨今、共働き家庭の増加やPTA活動に対する保護者の負担感の高まりを受け、PTA活動の「量」と「質」を見直し「無理なく、意味のある PTA活動」を目指す動きが広まっていると考えます。
発表校である埼玉県立越谷特別支援学校では、保護者の「こんなことができたらいいな。楽しいな。」という声を大切にし、PTA本部役員を中心に、実際に取り組むことが可能で時代に合った活動を、効率的に検討し実行しているそうです。

【分科会報告】
グループ討議では、「PTA活動で大切にしていること、そのための秘策！」をテーマに、5グループに分かれて意見交換が行われました。
各校のパンフレットや動画、ニュースレターなど、PTA活動の意義を伝えるための工夫が紹介され、活発なやりとりが展開されました。
また、大会主幹校である埼玉県立越谷特別支援学校の教諭からは、「役員が前向きに楽しんで活動する姿が、自然と周囲を巻き込んでいく」とのエピソードが共有されたことも大変印象的でした。
特別支援学校のPTA活動には、保護者の声を行政へ届けるという大きな役割があります。
医療的ケアや卒業後の進路に関する要望などを社会に働きかけることができるという点で、地域校PTAとは異なる特色をもっています。
この意義を広く伝えるには、文章だけでなく視覚的な工夫、そして役員自身が楽しんでいる姿勢が、何よりのメッセージになるという共通認識が生まれました。
さらに、助言者であるgee design代表・関根健一氏による講義では、「ナッジ理論」の観点から、PTA活動への関心を自然と高めるための仕組みづくりが紹介されました。
「無理に参加を求めるのではなく、思わず関わってみたくなるような仕掛け」が、これからのPTAには求められるという視点に、多くの気づきを得ました。
初めての大会参加で、緊張の連続ではありましたが、同じ思いを抱く仲間の存在に支えられ、共に声を上げることの力を実感できる時間となりました。
今回得た学びや気づきを、今後の活動にもつなげていきたいと思います。
なお、大会後に発表された宣言文は、文部科学省・厚生労働省に提出される予定です。
正式な文書が公開され次第、あらためて皆さまにも共有させていただきます。

PTA活動、カギは“質”にあり。
量をこなす時代から、
意義のあることを、わかりやすく。

【第２分科会】　参加者：ＰＴＡ副会長　Ｋ・Ｍ

主題：学校教育と医療的ケア
副題：『*Taiga*』～大翔（たいが）さんの一日～
発表者：神奈川県立麻生支援学校　*PTA*　秋山　恵美子

【提案趣旨】
麻生支援学校に通う、医療的ケアが必要な大翔さん。
登校から下校までの1日中で、たくさんの人たちに支えられて頑張る様子を中心に学校の取り組みや、工夫を紹介しています。またその中でも看護師さんの足りなさを感じていることも事実とのこと。
そのため今回はこの発表を通し、いろんな学校での医療的ケアの実施の様子を討議しました。
【討議テーマ1：看護師配置と各校の工夫】
大半の学校では、常勤・非常勤の看護師が勤務しており、医療的ケアを必要とする児童生徒の支援を行っているとのことでした。また教員が研修を受講し、担当する児童への医療的ケアを実施しているという事例もあり、学校ごとに工夫しながら体制を整えている様子が共有されました。
送迎についても話題になり、学校から医療的ケア児専用の送迎車両を出している学校がある一方で、保護者が福祉タクシーや訪問看護ステーションと個別に契約し送迎をしているケースもありました。「保護者自身が看護師や車両を手配しなければならないことが大きな負担になるのでは」という課題が挙がる一方で「週に数回でも単独登校できることはとてもありがたい」と前向きに捉えている保護者の声もあり、状況の受け止め方には幅があると感じました。
このテーマを通して医療的ケアや支援体制の整備については、地域差・学校差が非常に大きく、それぞれの現場での努力と工夫があることが見えてきました。
【討議テーマ2：医療的ケア実施の状況共有】
胃ろうからの経管栄養に関してシリンジ注入を行っていない学校もある一方で、2～3口の味見をしてからシリンジ注入を行っている学校もありました。
ケアそのものではありませんが気管切開をしている児童のプール授業の対応も学校ごとに差がありました。「気管切開があることでプールに入れない」とする学校がある一方で、「気管切開・呼吸器を使用していても、条件付きでプールに参加できる」体制を整えている学校もありました。
また宿泊行事や校外学習といった学校外での活動においても保護者が同行することを前提とする学校もあれば、看護師の付き添いで可能な学校もありました。その際には訪問看護師を利用していて、県や市区町村と契約している形で導入されているケースが多く、公的制度を活用しながら安全な医療的ケアの提供を実現している取り組みとして注目されました。
【助言者講義：埼玉県特別支援教育課・横谷氏】
埼玉県では平成21年から医療的ケアへの対応が進められており、福祉タクシーなどの支援制度も整っています。さらに「看護教員」を独自に配置し、医療と教育の両面から支援ができる体制を整えています。継続研修で専門性の維持も図られており、注目すべき取り組みと感じました。
【まとめ・感想】
看護教員の存在で体調の変化にも早く対応できることは安心につながります。宿泊行事でも訪問看護師が同行してケアが受けられる地域があることを知り、驚きと感謝の気持ちを新たにしました。質疑応答では保護者会の有無も話題となり、情報交換や支え合いの場の重要性を感じました。
今回の大会で、今受けている支援が先輩保護者の働きかけの成果であることを改めて認識し、関係者への感謝とともに、自分も行動していこうという思いを強くしました。

「できる」を広げる医療的ケア
子どもの学びと成長を支える体制づくり

【第４分科会】　参加者：PTA副会長　K・S

主題：子供の自立
副題：学校やPTAの取組とアンケート結果から見えてきたこと
発表者：山梨県立ふじざくら支援学校　令和6年度PTA会長　大渡　南美子

【提案要旨】
本校は肢体不自由単一障害の子どもは現在在籍していないため、知的障害と重複障害で在籍している子どもたちの「自立」という点から、学校やPTAの取組を紹介します。学校では、小中高と一貫したグランドデザインのもとに自立を目指したキャリア教育を継続的に実践しています。教科「作業学習」「職業」で」学び、年2回の現場実習に繋げています。それ以外にも卒業後の自立に向けた活動や「共生社会」を意識しての「学校間交流」や「居住地校交流」「地域交流」を積極的に推進しています。PTAの取組では、保護者同士がつながる場や学ぶ場を創出していますが、この大会を機会に「こどもの自立」についてアンケートをしたところ、保護者の不安や知ることができました。PTAとして「各所との連携」と「情報の発信・共有」をしていく必要性を感じています。

【討議テーマ】
・子どもたち一人ひとりが自分らしく暮らすために
・肢体不自由・重度心身障害（医療的ケア含む）の「本当の自立」とは
・在学中に大切にしたいこと
8つのグループに分かれて協議し、発表者が各グループの意見をまとめて発表しました。

【まとめ】
① 社会に出るにあたり、就労先の確保だけでなく、居宅介護・ショートステイ・日中一時支援などの福祉サービスの利用によって、安心できる居場所や理解者を増やすことが「親子の心の自立」につながるという意見が多く出されました。
② 地域資源の活用や情報収集において、保護者同士のつながりや地域との関係づくりが重要だという認識はすべてのグループで共通していました。また、体育で体を動かす、ICTを使った意思表示など、在学中の学びや経験が卒業後の「その子らしい暮らし」を支えるという声も共通していました。

【助言者より】
障がい児支援は本人だけでなく家族のQOL向上にもつながります。成長段階に応じた暮らしの安定は、本人の安心感や意欲にもつながるとのことでした。
保護者・教育・福祉の連携による「トライアングルプロジェクト」や、都留文科大学による「クロスボーダープロジェクト」など、障がいの有無を超えて100人規模が集い、アートやスポーツを通してつながりを深めている事例も紹介されました。
「保護者は一生その子の親として、常に何かしらの責任を感じ、目の前のことに精一杯になることもある。だからこそ、悩みを一人で抱え込まず、相談できる人や動いてくれる人を見つけてほしい」との助言が印象に残りました。

【大会に参加しての感想】
「大会って何？」というところからのZoom参加でした。事前動画は繰り返し見ましたが、グループワークでは自分の考えがまとまらず、話しながら何を言っているか分からなくなり反省しています。次回参加される方は、ぜひ事前準備を忘れずに。
助言者の先生の言葉がとても心に残りました。最近、靴や装具のサイズが合わなくなっていたことに先生に言われて初めて気づき、自己嫌悪に。でも「見てくれている人がいる」ことに感謝しました。
親子で頑張るところ・気を抜くところ・人を頼るところのバランスを取りながら、これからも共に頑張っていきましょうね。

福祉サービスと地域のつながりで築く
“ 本当の自立”